

## 炭鋤夫が炭鋤夫の生活を書くということ：山崎喜与志作品はいかに読まれたか

茶園，梨加  
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年

<https://doi.org/10.15017/11025>

---

出版情報：九大日文．9，pp.52-66，2007-03-31．九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 炭鋳夫が炭鋳夫の生活を書く ということ

——山崎喜与志作品はいかに読まれたか——

CHAIKEN  
茶園 梨加

はじめに

炭鋳労働者の文学はどのように読まれてきたのだろうか。彼らが、自身の炭鋳労働者としての生活を書くことは、どのように捉えられてきたのだろうか——。一九五八年から一九六一年に活動を行った九州サークル研究会「サークル村」の孕む今日の問題を考えると、「サークル村」(第一期)という運動体を作り得た要因として(九州)が抱えた近代化の象徴である(炭鋳)の果たした役割は大きい。炭鋳労働者の言葉が(文学)として表現されるとき、放出されるエネルギーはアメーバーのように広がり、連帯の強度を強めたものではなかったか。

本稿では自身も炭鋳労働者であった山崎喜与志の作品を取り上げる。山崎は、福岡県遠賀郡水巻町の日本炭礦高松坑で働きながら、地元の文化サークル誌や労働組合のサークル誌に小説や詩を投稿していた。その後、「サークル村」や「新日本文学」でも作品を発表することになる。今回対象とするのは、「サー

クル村」以前の一九五八年までの執筆活動についてである。「サークル村」と関わるまでの過程において、労働者作家である彼の作品がどのように読まれたのかを追うことを目的とする。彼は、例えば「月刊炭労」の文芸コンクール等で入選や佳作に選ばれている。その時の評価のされ方をさぐる一つの方法である。また、掲載雑誌ではしばしば労働者文学について論じられていた。その議論の傾向と、山崎作品の評価との関係性を示すことで、一九五〇年代に炭鋳労働者の文学が抱えた問題にせまってみたい。

## 一 書誌

山崎は日炭高松労働組合の文化サークル誌「地下戦線」「炭鋳長屋」「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」の他、水巻文学サークルが発行した「蟻塚」や、「月刊炭労」、「サークル村」、「新日本文学」に作品を発表した<sup>①</sup>。今回調査して明らかになった書誌を次に掲載する<sup>②</sup>。(\*)は論者の注である。ジャンルについては、作品名の前に表記した。特に記述が無いものは小説である。また、筆名は「山崎喜与志」「山崎喜興志」「山崎崑与志」「西浦公志郎」も用いており、ここでは「山崎喜与志」以外の筆名で発表しているものについてのみ、作品名に次いで注記した。但し、目次と本文で異なる場合は、本文の記述に拠った。各項目の最後に掲載頁数を表記している。一九五三年の「幸福」は、上野英信が「一九五三年の春のこと」(書評 山崎喜与

志小説集『炭坑夫』(労働者が労働者の生活を書く)ということ、「新日本文学」一九七五年三月)と記述していることを参考にしたが、掲載雑誌や発行月などは確認できなかったので、「未詳」とした。また、連載作品「いのち」の回数については、各々の初出本文の記述に拠った。一九五六年十二月「月刊たかまつ」第二号掲載の「いのち」については「(その六)」となっておりが、おそらく「(その五)」の誤りだろう。一九七四年刊行の『炭坑夫』に所収されているが、該当箇所は五章となっている。内容を照らし合わせてみると、その他の部分では、章番号と連載回数が同じである。よって、「(その五)」の誤りであるだろうと推測できる。今回は手にとることができなかったが、一九五七年一月に発行されたであろう第三号に「(その六)」が掲載されていると思われる。

一九五三(昭和二十八)年

未詳

五月「地下戦線」第一号「幸福」

「短編小説集『小さな家の窓』より二篇(その一)女(その二)

蚤」(\*西浦公志郎)(三十八―四十四頁)

七頁)

七月 “ 第二号「煙草」(\*西浦公志郎)(二十八―三十三頁)

十二月 “ 第四号(\*詩)「世紀の花束」(\*西浦公志郎)(八頁)

(\*詩)「硬山」(\*山崎喜與志)(七十一―七十二頁)

一九五四(昭和二十九)年

三月「地下戦線」第五号「地底」(\*西浦公志郎)(十一―十五頁)

頁)

「政吉爺さんの死」(五十二―五十五頁)

十五頁)

四月「蟻塚」第六集(\*詩)「硬山」(四十一―四十三頁)

一九五六(昭和三十一年)

一月「月刊炭労」第六十八号「昇坑」(二一―三十一頁)

二月「炭砦長屋」第二号(\*エッセイ)「私の願い」(二―三頁)

三頁)

三月 “ 第三号「いのち」(二一―二十五―二十八頁)

頁)

四月 “ 第四号「いのち」(二一)(\*山崎喜与志)(三十四―三十七頁)

十四―三十七頁)

「蟻塚」第七集(\*エッセイ)「人間の歩み」(八九頁)

一九頁)

五月「炭砦長屋」第五号「いのち」(三一)(\*山崎喜与志)(三十四―三十六頁)

十四―三十六頁)

十一月「月刊たかまつ」第二号「名づけーいのち第四部」(二―十六―三十頁)

十六―三十頁)

十二月 “ 第二号「いのち」(二一)(\*山崎喜与志)(二―十六―三十頁)

十六―三十頁)

一九五七（昭和三十三年）

一月「月刊炭労」第八十号「炭鉱に埋もれた人々」(二十四十三頁)

二月「月刊たかまつ」第四号「いのち(其の七)」(\*山崎喜与志)(二十七―三十三頁)

三月 “ ” 第五号「いのち(其の八)」(\*山崎喜与志)(二十一―二十五頁)

五月 “ ” 第六号(四・五月合併号)「いのち(其の九)」(\*山崎喜与志)(二十六―三十二頁)

六月 “ ” 第七号「いのち(其の十)」(\*山崎喜与志)(二十七―三十二頁)

「蟻塚」 第八集「汝に栄光あれ」(\*山崎喜与志)(三十九―四十九頁)

八月「月刊たかまつ」第八号(七・八月合併号)「いのち(其の十二)」(\*山崎喜与志)(二一―七頁)

十二月「文芸誌たかまつ」第十号「国上さんの靈に捧げる」(\*山崎喜与志)(二一―三頁)

「いのち(第十三回)」(\*山崎喜与志)(三十六―四十一頁)

一九五八（昭和三十三年）

一月「月刊炭労」第九十一号「暗い部屋」(二四九―二七五頁)

三月「文芸誌たかまつ」第十一号「いのち(第十四回)」(三十一―三十九頁)

十一月「サークル村」第一卷三号「小さな場所」(四十二―四十八頁)

一九五九（昭和三十四年）

六月「サークル村」第二卷六号「身売り―暮しの窓より」(三十一―三十六頁)

十月 “ ” 第二卷十号(\*エッセイ)「臨海学校から」(三十五―三十七・三十二頁)

十一月 “ ” 第二卷十一号「つぎ目」(三十二―三十九頁)

一九六一（昭和三十六年）

七月「サークル村」第四卷五号「不安」(二十八―四十頁)

一九七四（昭和四十九年）

十二月(\*小説集)『炭坑夫』(新日文双書<sup>9)</sup>、土曜美術社)

一九七五（昭和五十年）

十月「新日本文学」第三三八号「闇」(三十四―三十九頁)

一九七九（昭和五十四年）

六月「新日本文学」第三八二号「嵐」(三十四―四十七頁)

一九八三（昭和五十八年）

一月「新日本文学」第四二五号「老」(八一―三十一頁)

彼が発表した作品は、昭和初期の炭鉱労働者の生活、炭鉱長屋の様子を描いたものがほとんどである。その一方で、一九七

九年、八三年に「新日本文学」に発表した「嵐」「老」は、かつての炭鉱の回想も交えながらも、主に閉山後の様子が元炭鉱労働者の視点から描写されていることも付け加えておきたい。

## 二 山崎喜与志と上野英信

西之浦<sup>（へんり）</sup>さんの作品をよんだ人は、その人が専門の作家であろうとまったくの素人であろうと、必ず一様に「実におさなくたどどしい」と云い、「だが実に生き生きと描かれている」と云う。（中略）見せかけだけは確かだが、その実は重く疲れきった棒くいを、たゞ習慣的に動かしているにすぎない大人たちの空虚な脚どりにくらべて、西之浦さんの、その小児のような脚どりの、なんと力と美と生命にあふれていることか。彼の作品の一番大きな魅力がここにあり。（中略）私は心から彼の文学が一日もはやく成長して、彼の、「小さな窓」から雄々しく社会の荒浪のなかに飛びこんでゆくことを願っている。然しそれ以上に、その日までもっともっと沢山、「小さな窓」の中で、よりすぐれた作品を書きつけてもらいたいと願っている。それは必ずや働く者の文学が到達しうる或る一つの、最もすぐれた里程標たり得ると信じて疑わない。——真の意味に於ての、働く者の「ホーム・ドラマ」として。（うえの・ひでのぶ「西之浦さんの文学について」、『地下戦線』第一号、一九五三年五月、傍点原文）

同じく日炭高松で働き、当初労働組合内の文学サークルで中心となって編集や執筆を行った上野英信は山崎の文章についてこのように記している。後に『炭坑夫』の書評、「労働者が労働者の生活を書く」ということ（前掲）の中で、上野は山崎との出会いを語っている。「一九五三年の春」に上野は山崎の「幸福」という掌編を「労働組合の機関紙」で目にする。「ほう、この炭鉱にもこんな美しい作品の書ける人がいたのか」と「目の覚めるような思い」をした上野は、そのころ彼が結成していた「筑豊炭坑労働者文芸工作集団」のサークル誌「地下戦線」の創刊号に寄稿を依頼した。そこで先の書誌で挙げたように「女」「蚤」を発表する。その後上野が携わった「地下戦線」から「サークル村」に至るまで作品が掲載されることになった。ではなぜ、「地下戦線」創刊号で上野によって「おさなくたどどしい」が「生き生きと描かれている」と評価される作品が、ここでは必要とされたのか。この評価を成り立たせた雑誌の意図とはどのようなものであったのだろうか。同じ創刊号の「編集後記」の中で編集部は、「原稿を書かれる方へ。どうか固くならないで、小学生が綴方を書くような気持ちで、思ったままを書いてください。この機関誌は、ヤマの綴方教室なので、すから。うまい文章をつくらうなんてゆめにも考えないでください。」と述べている。ここで必要なのは小説を書くことの技術ではなく、より多くの労働者が自分の言葉で、文章を書くこと、それ自体にあった。山崎の作品は、そこでいわば「手本」のような役目を果たす。自分と同じ労働者が、彼ら自身にとつ

ては決して変わり映えのしない炭鉱の生活を書き、その物語が炭鉱生活を営む人々によつて共感をもつて受け入れられる。その一つの好例として読まれていたのではないだろうか。

例えば創刊号掲載の作品「蚤」。炭鉱労働者が妻子と川の字になつて眠ろうとするのだが、無数の蚤が自分たちの周りを這つていることに気づく。なかなか眠れず、ついには全部殺してしまおうと思いつき、夜が明けるまで蚤を殺し続ける。

彼は、ふと、遠い昔のことを思い出した。それはもう薄らいだ記憶であるが、懐かしさがしじみ湧き出て来る。

そして彼の一生消えないであろう記憶であつた。／＼……彼は夜中に目をさました。すると、彼の目のままで、彼の父が坐つて、彼の頭のあたりの敷布団と畳の境をじつと見つめていた。その時彼は、父に何をしているのかを質(たず)ねたのであろうが、彼には記憶がなかつた。ただ父親が云つたことだけはよく覚えてゐる——「武雄こうやつて座つておるとの、蚤の這うて来るのが、ようわかるわい」(中略)／彼はあの時の父の姿を思い出すと、父もこうやつて蚤に攻められ、蚤をとりながら、真暗い地下で石炭を掘つては、子を産み、子を育て、そして誰の記憶にも残らないような貧弱な生涯を終つたことを、わびしく思つた。同時に、彼自身も、近ごろの世相と食糧危機におびえながら、なんらの希望もなく、夏が来れば蚤に攻められ、冬が来れば寒さにふるえながら、石炭を掘らされ、子を産み、子を育て、

時が来れば、泡のように消えて行く、はかない運命を思い見た。華やかな人間社会の日の目もみないで、殺されて行く蚤のような……。(地下戦線 第一号)

主人公は、かつて父も同じように蚤に苦しんでいたことを思い出している。彼ら炭鉱労働者たちを悩ます蚤は昔も今も変わらない。疲労困憊の身体に、明日も同じ労働が待っている。少しでも長く、深く睡眠をとつて回復しなければならぬという焦りから、更に睡魔が遠のく。相変わらず彼らの労働状況が改善されないことが読みとれる。そして自身の、蚤のような「はかない運命」を嘆く。かつての炭鉱労働者たちも、ましてや自分の仲間たちも同じように、炭鉱労働者としてのはかない命を生きている。

一方、同号に載つた「女」<sup>(4)</sup>は、炭鉱労働者を夫に持つ、三人の子どもの母親が主人公である。「毎日労働でぐつたり疲れ帰る夫」と「一日中をコマのように」家事に追われて働く妻は、休養を兼ねて「隣町のお宮の祭」に子どもたちを連れて行く計画を立てる。そのために妻は長女に「可愛いリユックサックを買つて」やる。しかし、当日の朝、今日のために買ったリユックサックが見当たらない。妻は短気な夫から怒鳴られながら必死に部屋中を探し回る。「ただ、神経質な夫に品物を見せて安心させてやり、自分も安心したかつた。彼女は、意地からでもさがし出さなきゃ、と思つた。ただそれだけであつた」。二三ヶ月も四ヶ月も前から楽しみにしていた今日一日が、こんなこ

とで駄目になってしまったのかと思うと、涙がぼろぼろ出て来た。その時、「何気なく、行李の横につんであるお客用の布団に手をかけ」と下からリュックサックが見つかる。その翌日から、また彼女は「わずらわしい家庭の雑事」に追われる日々をすごした。「そうして、一寸したことで、子供の世話をやいているうちに、忘れてしまったり、おき忘れたりすることは以前と変わらなかった」。炭鉱長屋に暮す炭鉱労働者の妻がいかに忙しい毎日を過ごしているかが、ユーモアを交えて描かれている。物語の中心は部屋中を探し回る妻の姿である。雑誌を手取る読者は何も炭鉱労働者たちだけではない。「編集後記」で「女の人の参加が少いのが残念です。ひまもないでしょうが、それだけにより切実な生活のうったえをこの紙上に吐露して下さい」（傍点原文）とある。つまり、炭鉱労働者を夫にもつ妻たちもまた、機関誌を読んでおり、彼女たちも想定された読者であったことが分かる。女たちが自分の生活を書くこともまた求められていた。「女」を一つの例として、女たちも共感できる機関誌作りが考えられていた。

### 三 地域発展のための文芸誌「蟻塚」

では上野の他に、山崎の作品はどのように評価されたのだろうか。「月光」（未掲載）が「蟻塚」第五集（一九五三年十二月）の第四回文化祭特輯号で佳作（第五席の次）、詩「硬山」（蟻塚）第六集が「蟻塚」の第五回文化祭の懸賞文芸作品に入選第三等、

「昇坑」（月刊炭労）第六十八号が三十年度「月刊炭労」文芸コンクール入選第一席、「炭鉱に埋もれた人々」（月刊炭労）第八十号が三十一年度文芸コンクール入選第二席、「暗い部屋」（月刊炭労）第九十一号が三十二年度文芸コンクール佳作という成績をおさめている。それぞれがどのような選評を受けているか、一つずつみていきたい。

まず「蟻塚」第六集で掲載された詩「硬山」は第三等で、選評を行った白石禎輔は「その生活的な点にひかれた。少し冗長。もつと飛躍が欲しいと思いました。」（蟻塚）第六集と述べている。内容に興味を持たせるが、技術が不足しているというのだ。その前号の第五集で創作「月光」について岩下俊作が選評をおこなっているが、彼は寄せられた十二編すべての創作を読んで不思議な気がしたと述べている。理由は、「文章もよく書けて小説らしい構成をもつてゐる作品には感銘が薄く、文章も稚拙で小説としてまとまりの悪い、所謂下手な作品に強い感動を受けた」からであった。その前者に当たるのが「嫉妬」（細川修治、第五席）、「若い子爵」（高松太郎、第四席）、「文学病患者」（国上雅弘、第二席）、「指きり」（水町修次、佳作）、「航跡」（吉原和敏、第一席）で、後者が「月光」、「空の彼方」（加納勝義、佳作）、「幸不幸」（立石炭輝、佳作）、「兄の墓」（鶏珂進、佳作）としている。「下手な作品に強い感動を受けた」と言っているにもかかわらず、第一―五席が分類される前者をより高く評価していることが分かる。岩下は「私の今の気持からすると、小説すれしない下手ではあるが感動のこもつた作品が好きだが、一応小説の水準から云へ

ば前者に点を与へねばなるまい」と付け加えている。「一応小説の水準から」評価せねばならないという、いわば義務的な心境で選評を行う岩下の立場とは何であろうか。少なくとも、「蟻塚」誌面上で評価し読者の期待に耐えうる作品を選ばなければならぬことと、岩下個人の好き嫌いのレベルで作品を見た場合、そこには一種のズレが生じているといえる。ではそもそも、「蟻塚」はどのような趣旨で創刊された機関誌だったか。

「水巻町長水巻町公民館長」、大貝五十三は「創刊を祝して」(「蟻塚」第一集、昭和二十六年三月)の中で、終戦六年目になって「いよいよ軌道に乗った建設の槌音が甞しているが」、一方で「我々の窓から遠からぬ北方の空にひしめく暗雲が、再び平和と自由とを脅かすものではないかとの懸念」がある。この情勢の中で「近年著しく発展しつゝある我が水巻町」から「平和と自由と真理との旗を掲げ、文化水巻の先駆者として、水巻文学サークルが」、機関誌「蟻塚」を創刊することを「心から祝して」いる。終戦後文化国家建設が唱えられるが、その「文化」こそ、「二国の発展を、只その武力や富の力のみ頼ることの愚かしさ」を救う「唯一のものであり」、水巻町の功績と努力を「本誌に期待している」。「北方の空にひしめく暗雲」とは、一九五〇(昭和二十五年)年に勃発した朝鮮戦争のことである。それにもない石炭需要が増加したことは言うまでもない。また、「水巻町制施行十週年記念に文藝作品を募集した」ことが「編集後記」に記されている。ここで語られる機関誌の意図とは、「この一冊から水巻町の発展策が生れ、インテリゼンスが育ち

音楽や絵画が論ぜられ」ることであり、「こうした意味で近く誕生する音楽サークルや絵画、映画サークルの人達」からも意見が積極的に出ることであるとした。ここで求められているのは「地下戦線」にあるような、炭鉱労働者たちが書く「生き生きと」した作品ではない。町民が「文化的な水巻町」をアピールする、より技術的な文芸作品である。例えば、第三集に特集が組まれた第三回文化祭懸賞文藝当選作品選評に於いて劉寒吉は以下のように述べている。

いはば九州の小さな町にすぎない水巻町が、全国でも例のすくない(あるひは類例がないのかもしれない)小説公募といふ文化事業を毎年くりかへし行つてゐることに、私は深い敬意を表する。ここではもはや作品の優劣など大きな問題ではない。駄作よりも傑作が欲しいことは選者としてはもちろんの希望だが、そのことよりも、このやうな募集を通じて、町のひとの文化度がきつとめざましい向上の道をたどり、町のひとの心が美しくうるほつてくるにちがひないといふ楽しい期待のほうが大きい。／水巻町は、一度高松礦をあはたさしく訪れたことがあるだけで、くはしいことはなにも知らないが、この毎日の小説公募が行はれるといふ一事だけで、この町の明るい美しさが私には想像できるやうである。きつといい町であるにちがひないと思ふ。(「蟻塚」第三集、昭和二十六年十二月)



劉はこの時の選評で、第一、二席に該当する作品はなかったと、手厳しい評価を与えている。そのなかで第三席に選ばれた小手川良徳の「母とK子との間」について、その内容は「とりたてて論じるほどのものではないが、軽快な手法と独特な文章が効果的」だと述べる。同じく「第三席」（と劉は書いているが掲載頁には「佳作」と付されている）の糸山登志雄「二つの縁談」については「若いひとの精神の一つの在り方を示してゐて、その意味では興味を持つことができた」としながらも、「小説としては、思索の方法、構成、文章など」に多くの課題があるという。内容は面白みに欠けるが手法が効果的な作品と、内容には興味を持つが技術的な面に欠ける作品である。このことは先に挙げた山崎の「月光」を選評した若下俊作の言葉と重なっている。つまり、ここでも、評価の軸となるのが文章表現能力であるのだ。

文化的な明るい水巻町をめざす文化サークル活動としての「蟻塚」と、一方で炭鉱労働者が自らの言葉で、明るくも暗くもある彼らの生活をありのままに描いていこうとする「地下戦線」。「炭鉱長屋」は、意味合いが全く違うことが分かる。それは、炭鉱町がその内に抱える二律背反的な地域発展の様相の一つであるだろう。所謂「荒くれ者」たちの多い炭鉱がもたらす風俗を一転させ、文化的に明るい炭鉱町を打ち出す一方で、炭鉱労働者たちは相変わらず毎日を労働に明け暮れ、身体を消耗させる炭鉱長屋の生活を生きているのだ。そこにあるのは明るさも暗さも混然となった生である。

#### 四 「月刊炭芳」における評価

その他評価を受けた作品として先に挙げたように、「月刊炭芳」の三十年度芸芸コンクール入選第一席の「昇坑」、三十一年度入選二席「炭鉱に埋もれた人々」、三十二年度佳作の「暗い部屋」がある。「昇坑」は、初めて坑内に下がる新参坑夫の一日を描いたものである。採炭労働、またそこで起こったガス爆発事故と、死者を坑外へ担ぐ様子が、主人公川島の心の変化とともに描写される。

川島がいま、坑夫たちの生活や、環境に似つかわしい、この飾気のない、バラック建の練込場で、日頃軽蔑していた坑夫たちと、膚をふれ合わせ、顔をつき合せて見ると、意外にも偉大な人間の集りであることに恐れをなした。彼らは地下の自然を征服しきった、逞しい魂たまごいと逞しい筋肉との持主であった。彼らから軽蔑にあたいする片影さえ見つけることができなかつた。彼らは絶えず談笑し、うまそうに煙草をふかしていた。（中略）川島は彼らのこうした集団の中にとけ込んだ瞬間、始めて彼らの真実の人間を見たような気がした。（二章）

マイト穴をくるドリルの音が、ゴウリゴウリ、ゴウリゴウリしている。炭壁を叩くツルバシの音が切羽全体から、

まるでふりこの時計を何十箇も懸<sup>つ</sup>けてるようにコッソコッソと入られて聴こえる。それは、巨大な炭壁と人間とのたしあいだ。(中略)まこと、この一打こそ巨大な炭壁をゆすり、炭鉱資本をふとらせ、産業に大きな力をあたえ、政治や経済までもゆり動かしていった。これこそ採炭夫の本領なのだ。(三章)

それでも生きて、傷ひとつ受けないで、無事に昇坑するということは、どんなに倅せなことだろう。あの無限に拡がっている大空を見るだけでも、もう十分に生き甲斐があるので。そこには、自然が人間にあたえた無限の自由があるからだ。(四章)

かつて炭鉱夫たち、そして〈炭鉱〉それ自体を「あまりに、貧しさや、汚辱や、怠惰や、不衛生さが満ちみちてい」という理由で軽蔑していた彼は、彼らの力強い精神と肉体を見せ付けられ、労働者という大きな集団の力に気づかされるのである。山崎は、「炭鉱長屋」第二号掲載のエッセイ「私の願い」で「昇坑」が選ばれた喜びを綴っている。彼の願いは、炭鉱長屋の「苦<sup>く</sup>るしい生活や、坑内での劇しい労働が、世間の人達、つまり政治家や、資本家や、学者などによく知られていないから、私達の生活をよくしてやろうとする気持ちだが、湧いてこないのではなからうかと思ひ、私達の労働や生活や人間観の実際をなにかの方法で、この世間の人にしらせたい」ということだった。

また同時に「貧しい生活の中にも、油にまみれ、スパナを握り、ハンマーを振る労働の中にも、美しい、ロマンスや、詩があり、芸術的なものがある」のであって、「人間が、汗を流して、働いている時こそ美しく尊いもの」はなく、「この私達の労働や生活の中から、詩や小説を書いて、それを香り豊かな芸術にまで、高めたい」とも思っていた。自分の書く作品によって炭鉱労働者の「政治的経済的社会的な地位を高めたい」という思いと同時に、「書く小説や詩を、芸術と云えるもの」にまで、しあげたい」と願っていた。

このエッセイの後に編集部は、「月刊炭労文芸特集号は、炭鉱労働者作家の検舞台であるばかりでなく、全国の労働者の最も尖端をゆく文化戦線の斗いの姿でもあります」と書いている。「月刊炭労」で求められている作家像とは、ひたむきに積極的に自分の姿を見つめる炭鉱労働者作家である。選評を行った西野辰吉は、「死体をもつて昇坑する人たちの秘められた深い悲しみなどがよく描かれて」おり、「それまでに到る炭坑の様子や時代の推移も適確にでている」ことを評価している。更に「主題への作者の取り組みかたも素直で真面目であ」り、「少し長過ぎる感じもしないではないが、作者の誠実な態度が案外に退屈を与えない」と述べている。単調さを感じさせない技術の有無よりも、山崎の「誠実な態度」を評価しているのである。応募作品全体の感想としても、「かきなれていらいしい筆達者なひとの作品より、表現にたどたどしいところがあっても、書こうとする対象に真剣に取り組み、誠実に問題を追求している

ひとの作品のほうが、高い文学の感動を形象している」という。それは西野が文学作品を「生活の認識の形象による表現」と捉えていて、だからこそ「うまくかく」ということは、何をどう描くかということと切りはなして考えることのできない問題」なので、彼は「むろん何がどう描かれているかという観点から入選作と佳作を」選考しているのである。

このことは、三十一年度文芸コンクール入選二席の「炭鉱に埋もれた人々」、三十二年度文芸コンクール佳作の「暗い部屋」についても共通している。前者については、西野辰吉から「こまかく、綿密に、いきいきと描かれている」（『月刊炭労』第八十号）という評価を受けている。ここでは後者の「暗い部屋」について詳しくみてみることにする。

「暗い部屋」は貧困と、労働の疲労と性欲で悩む坑外夫の話である。彼は炭鉱の鍛冶工場で働いている。「六畳と三畳の二部屋と、半坪程の、狭い土間とに限られた、各家庭同志は、親密なつながり」で「結ばれているとはいえない」。中風で半身不随の父、炭鉱労働で足に怪我を負い不自由な体の母、生活力のない自分自身を、時に「もつともつといじめぬいてやりたい」と悪魔のような自虐心から「それの恐ろしい衝動をどうにか制して」いた。朝鮮戦争の勃発もあり、「今にも第三次世界大戦が起こるような口振りで、世界の情勢が語られ」ていた。そんな中、「私」は栄という事務で働く女のが好きになる。彼の唯一の希望の光が彼女だった。しかし、自分の今の状況を考えると様々な障害が立ち現れ自信がなくなり、結局

思いを告げられないままでいた。夜になると寝つきが悪い上に、「一度性欲のさかんな衝動に捕えられると、もうちっぽけな理性の力ではどうすることもできないで、ずるずると汚辱の世界にひきずりこまれ」ていた。家族共々雑魚寝をするなか、母や妹の寝相に「あやしい心のときめき」を感じていた。そんな次の朝は決まって手淫の後の悔恨に苛まれるのである。

野間宏は「選後評」（『月刊炭労』第九十一号）の中で、「性についてはこれまで問題の重要さのわりに、労働者文学にはとりあげられてこなかった」、その点からすると山崎が「自慰」の問題なども明らかにあつかっていることは注目される」と書いた。だが、「ここでも性の扱いはまだ暗くとぎされて」おり、更なる追求をもとめてもいる。彼の批評に対する山崎の具体的なコメントは見つけられないが、一つの応答として長編小説「いのち」が挙げられる。

「いのち」は「炭鉱長屋」三号から連載が始まった。機関誌の廃刊にともない、第四回からはその後を継ぐかたちとなった「月刊たかまつ」に発表の場を移す。掲載雑誌の詳細については先の書誌に挙げたとおりである。欠号もあり、連載すべての初出に目を通すことはできなかった。「いのち」は一九七四年十二月に刊行された小説集『炭坑夫』に全文が所収されている。全部で十六章から成り立っており、初出を見たところ、章番号と連載回数是一致している。ストーリーは大正元年の夏に、炭鉱労働者の主人公才造に富志雄という息子が誕生するところから始まる。才造は労働に追われ、妻トキは同居している姑ソノ

から、富志雄の子育てで厳しくしかられる毎日を送る。炭鋦長屋の人々は、悩みを抱えながらも、新しい「いのち」である富志雄の生を暖かく希望を持って見守る。しかし妻トキの体調が良くないこともあり、ある時、新しい後向（後山）にキクという、病身の同僚土井の妻がつくことになる。季節が春になった頃、才造とキクは真つ暗な坑内で「先山と後向の関係を乗り越え、性の欲望に走った」。「それは、尊いいのちの、かなしい衝動」だった。二人は地上でも頻繁に逢瀬を交わすことになるが、ある夜もキクとの密通後に帰宅すると、富志雄がランプをひっくり返して火傷するという事故が起きていた。キクとの密通は「因となり果となつて彼ら一家に天罰を下した」と思い込む才造は、「赦してくれ」と心の中で叫びながら作品は終わる。

この作品における性描写は決して「暗くとざされた」ものではない。「人妻に対する不倫な感情であつても、彼は少しもやましいものとは思わな」いのである。互いに連れ合いが病身であるという共通点をもっている。キクに至つてはそのために夫婦の間での性交渉がほとんどない。彼女の内に秘めた〈エロス〉は、不幸な結婚生活や辛い労働に耐えたくましい「女坑夫のいのちの衝動」なのである。作品最後の才造の叫びにもかかわらず、坑内でのキクとの情事は、「やましいもの」が一切ない自由な性であることには違いない。それは坑内の世界が、彼らに地上のしきたりに縛られない思考を与えるからであつた。炭鋦独特の〈エロス〉がそこに存在する。松下博文は、「語り手はこうした才造あるいは病気の夫をもつキクの姿を否定的には

とらえようとはしていない。そうした関係もまた尊いながらも悲しい「いのち」の衝動の一例として把握しているからだ」（『敍説』Ⅳ、一九九三年七月、敍説舎）と述べている。松下がいう語り手の作用は、「いのちの衝動」として全てを許すところにある。それは、才造がいう、目に見えないが意識せざるを得ない「偉大な力」のことである。人間は「魂の動き」によつて考えたり、働いたりする。その魂が「神様や仏様と同じもので、つまり、ひとつにつながっているような」気がする、というのだ。おそらく「いのちの衝動」と「魂の動き」は同義語として読めるだろう。

物語にキクが初めて登場するのは第十回（月刊たかまつ）一九五七年六月、キクとの情事は第十五回（十五章）である。野間宏の選評が一九五七年一月であることと照らし合わせると、野間の指摘が創作に影響を及ぼした可能性も考えられるが、推測の域を出ない。しかし、山崎は野間が言つた労働者文学における性の「深い追求」を、炭鋦という場所性を十分に活かしながら「いのち」で作品化することができたといえるだろう。

先に挙げた選評のなかで野間は、応募作品全体を対象として、「炭労働の文学のあり方」について述べている。炭労働文学の強みは「労働者の生活そのものからきている」という「地道な現実感」にある。しかしそれは他方から言えば、「最初から一本調子なもの」ばかりを生むという弱点にもつながっている。つまり、「作品が日常生活に密着して」いるがために、ただ「そこ」に起る事件を記録するというやり方」になつてしまふからであ

る。「文学的な真実をつくりだす上で、やはり足りない面が出てくる」。「現実に着」しながらも「さらに構成の問題や、虚構（フィクション）の問題など、文学の方法を深める問題にとりくみ、解決し」なければならない、というのだ。確かに今まで見てきたように山崎の作品評価のされ方は、自らの労働生活を書くという、書く対象に力点を置くものと、所謂文学作品としていかに虚構し、構成するか、という技術面の大きく分けて二点を基に評価されていた。

ではこのことは、同時期に掲載雑誌でたびたび論じられてきた労働者文学の捉えられ方とどういう関係性があるだろうか。

## 五 労働者文学の捉えられ方

「月刊炭労」では、労働者文学について何度となく論じられてきた。ここではそのいくつかを挙げて議論の傾向をみてみよう。

花田克己は、三十年代文芸コンクールについての批評を「胸をうつ作品がない（文芸特集号）」（月刊炭労 第六十九号、一九五六年二月）で述べている。「創作を始めたとして、胸にガンとひびく作品がない」、「本当に一緒に働いている仲間たちからムサボリ読まれる作品の生まれる事を期待」する、と選ばれた作品について批判的にみている。「この点、炭塵で顔を真黒にしている仲間の方を向かず、中央の専門作家の方に気をとられる事の多かつた自分自身の創作態度にきびしい反省をうながし」たと

いう。また、三十一年度文芸コンクール評論の部で佳作に選ばれた木村日出夫は「文化サークルの大衆化について」（月刊炭労 第八十号）のなかで、書く対象の問題と文章能力の関係性について触れている。「何時までも、へたくそ万才であつてはならない。私達の尊い体験を生かすのには、表現力を身につけなければならぬ。労働者作家たちは自分たちの「体験の文学」を書かなければならないが、そのためには体験だけではなくて、「われわれはわれわれの内部をも通じた方法で、体験上に積み重ねられた、レアリズムの文学をきづかねばならぬ。言うまでもなく、ここで木村がいう「表現力」は、しばしば彼らの中で批判的にみられている芸術至上主義であるという意味合いでの「純文学」の性質の「技術」ではない。自らの体験をそのまま記録的ではなく、より読者にうまく伝えるための表現力である。それは花田克己の言葉で言えば、「中央の専門作家の方」ではなくて、「炭塵で顔を真黒にしている仲間の方を向くことなのである。つまり「いかに」書くか、と「何を」書くかの問題である。この二点はその後も議論の対象となつている。「サークル誌めぐり」を第七十五号（一九五六年八月）から連載している真鍋呉夫は、その第八回目的の（「サークル誌めぐり」8 作品評価の問題）（月刊炭労 第八十三号、一九五七年四月）において文学における「花派」（芸術至上主義「純文学」と「生活派」（体験の文学）の対立や矛盾が現に存在することを指摘し、打開の目処として、「個々の作品に対する善玉悪玉式の図式的な評価をやめて」、善玉と悪玉が「複雑にからみあつている様相をそ

のものとして」捉える必要性を説く。「われわれが注意しなければならぬことは、個々の作品にたいして「花派」あるいは「生活派」というレッテルをはることでなく、むしろそうした要素をたたく、その枠をぶちやぶろうとしている内部の潜在的なエネルギーを正確に評価し、意識化し、方法化してゆくこと」が必要だと述べている。

その一方で、当然ながら必ずしも炭鉱労働者作家は炭鉱のことを書かなければいけないのか、ということについても意見が出ている。炭鉱という狭い世界に固執するのではなくもっと広い世界をみてはどうか、という批判である。この批判に対して畑中康雄は「働く者の文学を書く態度について」（『月刊炭労』第九十二号、三十二年度文芸コンクール評論の部で佳作）の中で、「義務づけることは避けなければならない」が、「ヤマに生き石炭を掘っているぼくたちが文学をする場合、現実の生活をそしてその真実を文学に託するということは重要なことであり」、「まさに「ヤマに生きる」ぼくたちこそが全的に表現するものを持っている筈」だと述べている。このことは労働者文学とはどのような作品をいうのか、という定義そのものへの問いかけにつながる。三木喬太は、労働者文学とは「旗振り文学」とか、「組合文学」とか批判される過去のプロレタリア文学的なものを指しているのではなく、「現在の既成文学ではあき足らぬ労働者の生活があるからであり、われわれでなければ書き得ない体験と環境」のもとで、「それをわれわれの言葉で書き、新たな労働者文学をうち建てようとしている」と論じている（『労働者

の文学について」、「月刊炭労」第九十二号、一九五八年二月）。それは、山内哲生が「不熟な労働者文学——「長屋哀歌」を中心として——」（『月刊炭労』第九十四号、一九五八年四月）で述べているところの、「社会的視野のもと」の創作であり、「自己の内側に、現実を凝視する鋭い眼と、未来社会を透視する確信的な眼」をもつことである。

このように表面化してきた労働者文学の矛盾や葛藤を、炭労教育文化部は「われわれの文化活動の問題点——九州・山口両地方における文学活動を中心として——」（『月刊炭労』第九十四号）においてまとめ、考察を行っている。「これまでの作品には、いわゆる「組合文学」の枠のなかの類型的な作品が多かったことも事実」であり、炭鉱の作家たちが「落盤、ボタ山、キャップランブといったような詩的題材」に「よりかかって、素材主義的傾向を生んでいることも事実」である。だが、前者の批判のなかには「都会中心的な、あるいは小市民の頹廃を描くことを事としたいいわゆるブルジョア文学の影響がある」。「そのまた奥には、炭鉱労働者の文化にたいする、自身の生活にたいするコンプレックスがあることも見てとれる」のである。また作品評価の基準についても問題視されており、「作品評価のわかれ道が、各人の文学への態度にある以上」、「書き手たちが文化創造の主体性を確立できるかどうかによってしか解決されない問題であろう」としている。

しかし、そもそも文化創造の主体性を確立するために、書くことを促し、ある部分ではその「手本」ともなったのが炭鉱労

働者文学ではなかつたか。主体性を確立せんために書く一方で、主体性が確立できないから創作ができない。問題はメビウスの帯のように始点へともどるのである。働者作家は「いかに」と「何を」の中で揺れ動き、彼らの「体験の文学」をうまく位置づけることができないまままでいたといえる。山崎喜与志に、拙いがいきいきと描かれている、という評価の一方で、いきいき描かれているが拙い、という評価もあつたことに、その一例を見ることができるのである。山崎の作品は、それが評価対象となる時、定まつた位置を持たない宙に浮いた状態に置かれている。

その後の炭鉱労働者文学の捉えられ方については、稿を改めなければならぬ。問題は「サークル村」にも引き継がれ、その大きな組織体のなかで働者作家は正に、「いかに」「何を」書くか、そして「いかに」連帯し主体性を確立するのかを、つねに互いに問い続けたのである。「サークル村」の始動は、すぐそこまできていた。

#### 【注記】

1 「地下戦線」「炭鉱長屋」「サークル村」の発行所、発行者等については、『サークル村』『労働藝術』『地下戦線』『炭鉱長屋』解説・回想・総目次・索引(不二出版、二〇〇六年六月九日)を参照されたい。(ここでは「蟻塚」「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」の発行所、編集者、発行年、発行年月日等を注記しておく。「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」については前者が一―二号、四―八号を、後者が十一―十一号を入手できた範

圍で記している。

「蟻塚」：発行所水巻文学サークル(水巻町公民館内)、編集者杉江勇、発行所赤星忠臣。第六集は、発行所水巻町公民館(蟻塚編集同人)、編集者吉原和敏、発行者大貝五十三。第七集は、発行所水巻町公民館(第十集、編集人持永辰雄、発行所蟻塚編集部。第八集は、編集者山本信夫、発行所石橋豊蔵(第十集)。第九集は、編集者鈴木昭彦。第十集は、編集者増永龍之。第一集(昭和二十六年三月一日)―第十集(昭和三十八年十月十日)

「月刊たかまつ」：発行所日炭高松文学・美術サークル協議会、発行編集責任者上田博、事務所福岡県遠賀郡水巻町頃末日炭高松労働組合教育宣伝部。八号は日炭高松労働組合文学美術サークル協議会。第一号(一九五六年十一月一日)―第八号(一九五七年八月七日)。第六号は四・五月合併号、第八号は七・八月合併号。

「文芸誌たかまつ」：第十号は、発行所日炭高松美術文学サークル協議会、編集者サークル誌編集委員会、発行責任者栗屋光教、事務所福岡県遠賀郡水巻町日炭高松労働組合教育(第十一号)。第十一号は、発行所高松労組美術文学サークル協議会、編集者栗屋光教・平岡義人。第十号の「あとがき」に「組合から援助を受けるようになってやつと二号目ノロマな歩みで申し訳ない。」とあることから、第九号から「文芸誌たかまつ」と機関誌名を変えたと思われる。第九号(一九五七年十一月か)―第十一号(一九五八年三月八日)

2 坂口博「サークル村」創刊前夜(『サークル村』『労働藝術』『地下戦線』『炭鉱長屋』解説・回想・総目次・索引)二〇〇六年六月九日、不二出版)によると、「一九五八年九月『サークル村』創刊までの日炭高松

における文学サークル」は、すべて確認できていないとしながらも、『フ  
エーニックス』『足跡』『たかまつ』『労働芸術』『高松文学』『蟻塚』『前  
進』『うつぶん』『稚拙』『地下戦線』『高松文学』『炭鉱長屋』『月刊たか  
まつ』『文芸誌たかまつ』を挙げている。このうち今回、論者が目を通  
すことができたのは、『労働芸術』『蟻塚』『地下戦線』『高松文学』（二号、  
三号）『炭鉱長屋』（月刊たかまつ）（一―二号、四―八号）『文芸誌たか  
まつ』（十一―十一号）である。なお、『月刊たかまつ』と『文芸誌たかま  
つ』の号数は通し番号である。

3 「新日文双書」は全九巻で、一九七三年に関根弘『夢の落ちた場所』、  
林健『境界にて』、藤森司郎『鉄道員』、神田貞三『ゾーツとすると話』、深  
田俊祐『志布志湾』、七四年に篠原貞治『武器のない砦』、はらてつし『競  
合脱線』、橋本雄介『大製鉄所』、山崎喜与志『炭坑夫』が刊行されてい  
る。『新日本文学』三三五号（一九七五年七月）、三三六号（同年八月）

などで「労働者階級作家の手になる自由と解放の文学ついに完成」と広  
告されている。

4 後に「母」と改題され、『炭坑夫』に所収。

\* 本稿における山崎喜与志作品の引用は、初出に拠った。但し、「いのち」  
については単行本に拠った。

#### 【付記】

資料の収集については坂口博氏、水巻町歴史資料館にお世話になりました。  
ここでお礼申し上げます。なお今回にとることができなかった資料に関し  
ては、ご教授頂ければ幸いです。

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年）